「体験」に科学的資料がからむとき

那須正幹のノンフィクション的作品を読む

今関　信子

日本児童文学者協会の機関誌「日本児童文学」編集委員会から、二〇二一年七月に急逝した那須正幹の追悼特集を組むにあたって、那須作品のノンフィクションの方法について考察するよう、依頼があった。その任ではないと思いながら、那須作品の読者だったので引き受けた。

まず、数えきれぬほど多くの那須正幹作品群の中から、ノンフィクション的な作品を選り出してみた。「ノンフィクション的」の語は、事実をもとにした作品、ある程度フィクションを加えたものも含めて、使っている。

（一）体験を根っこにおく

『ぼくらの地図旅行』（西村繁男・え　福音館書店　一九八九）から始めよう。あとがきにこうある。「この絵本の舞台となった野浜という町は、ぼくの住んでいる山口県防府市のとなりにある吉敷郡秋穂町がモデルになっています。絵本にするため、地形や地名、それに方角が変えてありますが、」。いわゆるノンフィクションとはちがう。しかし、この作品に、私は、那須のノンフィクション的な仕事の仕方や、作品に取り組む姿勢を見る。この絵本には、意地の張り合いから、徒歩旅行に出かけなければならなくなった、地図が読めるシンちゃんと、つきあわされる羽目になったタモちゃんが登場する。地図と磁石が道具だ。那須がストーリーと二人の心情を書き、画家の西村繁男が、二人の歩く町を描きだす。賑やかな通りから、人気のない里へ、そして山の中へ、二人は歩いていく。視界が開けたときは、海だ。自家用車、バイク、自転車、バス、重機を積んだトラック、豚を運ぶトラック、救急車、パトカー、一輪車、廃車、そして船など、子どもなら見落とさない乗り物が描かれる。西村の描く町には、働く人々のリアルな日常がある。那須の文と西村の絵は、空気も時間も描き出した。

山岳部で活動したことがある那須は、地図の面白さを知っていた。地図は、想像力を刺激して前途を予測させるが、その場に立った時の実感は、想像していた時とは大きな違